

利休居士の遺偈に就て

柴山全慶

はしがき

茶道完成の巨匠利休居士が豊太閤の忌諱にふれ、遂に死を宜せられて塚に下向し、天正十九年二月二十五日

人世七十 力圓希咄

我遺寶劍 佛祖共殺

の遺偈を書き、同月二十八日、最後の茶を喫み終つて悠々切腹した劇的事件は、普く人の知る處である。其後この遺偈の解意に就て、徳川の初期以來紛々たる諸説を見るのであるが、畢竟その原因とするところの中心は、該偈語中第一二句目の「力圓希」の一句にあることは云ふ迄もない。

然るに、古來この「力圓希」に對し、多くの人々がその見解を闕隙し、特に近年茶道の興隆と共に諸方の名士がその蘊蓄を傾倒せられてゐるにも拘らず、而も猶この語の検討に萬人を首肯せしむるに足る手續きを欠く憾みがある様に思はれる。故にその憾みを補ふ意味に於て、茲に前年來折にふれて蒐集した材料を整理し、多少とも正しき理解に導かんと試みたのであるが、頁數制限のため十分の意を盡し得ないのは残念である。

一

文献に見る「力圓希」の年代的序列

云ふ迄もなく「力圓希」は所謂の禪語として古來禪者の間に多く使用せられてゐる。然しこの語が文字上「力圓希」、力口希、力章希、力圓希、力圓希、力圓規」等多少の出入を示してゐるのであるが、是等の文字上の出入の検討は一切後節に譲り、こゝではこの三字より成る一語の存在を、今日迄記録し得た文献により年代的序列を試みることにす

る。

1 「力圍規」馬祖道一禪師（西七八八寂）

禪宗誌、第四六卷、第九號に於て、今井老師は利休の遺偈に關する解説中「蜀の方言の力圍規は馬大師以本禪語として宗門に用ひられて居る」と記されてゐる。然し、景德傳燈錄、五燈會元會の馬祖偈及馬祖錄にこの語を發見し得ないやうである。

2 「力口希」雲門匡眞禪師（西九四九寂）

雲門廣錄は、宋、神宗帝、熙寧九年（西一〇七六）上梓。故に利休遺偈中の「力因希」の出典としては、今日のとて最古の禪錄である。

綱 宗 頌

咄々々、力口希、禪子訝、中眉垂。

3 「祖庭事苑」宋、元符年間編、（西一〇九八）

善鄉師節の撰になる一種の辭典。然しこの事苑には雪竇頌古より摘出したる「因」に對し
因、音章。

4 「力圍希」韓利休（西一一四一死推定）

蜀成都の人、韓利休遺偈

人生七十力圍希、肉瘦骨枯氣未微、

這裡咄提王寶劍、靈呈佛祖共殺機。

然し目下のところ韓利休の逸事は、出典明確ならず、多分に神話的である。（禪宗誌第四六卷第九號、茶道百話等參照）

5 「力因希」無明慧性禪師（西一二三三七寂）

「上堂云、秋風離々、秋色依依々々、秋雲淡佇、秋月分輝、篆不彫之心印、狀似鐵牛之機、阿呵々々、力因希、再三撈攏始應知。」

6 「力因希」 虛堂智愚禪師（西一二六九寂）

「卓主杖曰、力因希、咄咄咄」（虛堂錄第二卷）「希」が「希」となつてゐる点が異なる。

7 「力章希」 無學祖元禪師（西一二八六寂）

日本、嘉慶二年（西一三八八）義堂禪師の撰したる「貞和類聚祖苑聯芳集」卷四に、北條時宗の招きにより弘安三年來朝せる圓覺寺開山無學祖元禪師の日本へ出立を餞した詩がある。

饒真如無學膺日本福山之命、一峯齊

萬松吟步獨遲々、心與身閑道自肥、

一對驗人双碧眼、眉間掛劍力章希

8 「力因希」 東福寺、白雲惠曉禪師

延寶傳燈錄卷十、正應五年上堂（西一二九二）

住東福乳香供聖一上堂

聲前一句量外機、三八九力因希、寶鏡當蓋不鑑、薰風來烟薔薇、諸人如會得八兩半斤、如會不得半斤八兩、且道秤落井時斤兩何處、卓主杖曰、參。

9 「力因希」 妙心寺、鐵山宗鈍禪師（西一六一六寂）

鐵山錄、（天球院藏）の金剛經供養文中に

「本來如露亦如電（中略）宜哉復莫實諸所無會慶、咄咄力因希」とあり、天正十七年（西一五八九）撰文らしい。

10 「力因希」 利休居士（西一五九一寂）

天正十九年二月二十五日書、遺偈。

人世七才、力因希咄、吾道寶劍、佛祖共殺。

利休居士の孫宗且居士は之を寫すに

人生七十、力圍希咄、吾道寶劍、佛祖共殺となしてゐることは注意すべきである。

11 「力口」 澤庵宗彭禪師（西一六四五寂）

「利休居士の茶道」千宗守著、この中に居士辭世の章があり「藪地一下」の意を「力口」と置き字しこの謚語が紹介せられてゐる。

力口

ケ秘密藏、八字打開、不蹈横路、直入得來。

元和四曆孟度日 澤庵野衲書、

12 「咄々齋」 千宗且（西一六五八寂）

「力圍齋」 山田宗徧（西一七〇八寂）

利休居士の孫宗且元伯は、自から咄々齋と號し、又愛弟子宗徧に力圍齋と號を與へてゐる。

13 「力囀希」 禪林句集、（西一六八八刊行）

著者、洛橋は雲門錄より「咄々々力囀希」を六言句中に輯録し、「リキイキ」と假名を附してゐる。特に假名の附せられてゐることは、貞和集の力量希と共に、その音讀に就て一つの意見を呈示してゐると思ふ。

14 「力囀希」 無著道忠禪師（西一七四四寂）

道忠禪師は享保十四年八月、七十七歳の時（西一七二九）「虛堂錄筆耕」を脱稿せられてゐる。その第五卷に「力囀希咄々々」を註してゐるが、「囀ハ口ニ作ルベシ、希ハ希ニ作ルベシ」と訂正してゐる。この訂正は自然その語意にもある示唆を授けてゐると考へられる。

二

「力囀希」は「力口希」と書くを正しとする説

「力囀希」の文献に於ける歴史的序列が雲門錄を第一とする時、此の語は雲門錄によつてその文字上の形を決定することは、最も妥當であると考へられる。従つて同錄の書誌的検討を要することは云ふ迄もない。然し今は假りに左の文

獻に依ることゝする。

(1) 大正新修大藏經、第四十七卷、諸宗部四、雲門匡眞禪師廣錄 卷上

「咄咄咄、力㊦㊧希、禪子訝、中眉垂」

③ ㊦㊧章例甲

明増上寺報恩藏明本古尊宿語錄之内

甲慶安二年版、大谷大學藏本

(2) 人天眼目臆說、(享保十八年西一七三三撰述)雲門宗の章に

「咄咄咄、力㊦㊧本錄作㊦㊧希㊦㊧舊解云助詞也禪子訝、中眉垂」

(3) 虛堂錄筆耕 (享保十四年西一七二九稿)

力㊦㊧啼、咄々々

忠曰、因當作㊦㊧、雪門錄作㊦㊧、因字、前ノ一ノ延福ハを辨ス、啼又當作㊦㊧希、雲門錄ニ作㊦㊧希。

以上によつて明かなる如く、雪門錄に見る三種の別、力㊦㊧希、力㊦㊧希、力章希は、「力㊦㊧希」と書くを最も正しとし、且つ根據たる形と見るべきであらう。

従つて、道忠禪師の考證によれば、虚堂錄に見る「力㊦㊧啼」も「力㊦㊧希」の誤り乃至は當字に過ぎぬことゝなる。

三

「力㊦㊧希」を「リキイキ」と讀むべきか

「リキカキ」と讀むべきかの問題

現在「力㊦㊧希」は「リキイキ」と「リキカキ」との二様の讀み方がなされてゐる。即ち㊦㊧字の音を「イ」と讀むべしとする意見と、「カ」又は「クッ」と讀むべしとする意見との二つがある。禪林句集は力㊦㊧希に「リキイキ」と木版刷の假名を付し、虚堂錄のある木版本には力㊦㊧啼の「㊦㊧」字に「クッ」と假名を付け、いづれもその音訓に特別の注意を喚

起してゐるのがある。

和訓略解禪林句集、山本俊岳編は、禪林句集古來の音訓を改め「リキカキ」と假名付けられてゐる。(註、如何なる理由にて古來よりの音訓を改められしや、との問ひに對し、山本師の答へは「リキイキ」と讀みては何としても意味通ぜず、依つて「リキカキ」と讀みあの略解をつけた。然し確たる根據なき故、何時にても訂正してよろしい。と云ふことであつた。)

(1) 因を「イ」と讀むべしとする説

祖庭事苑卷二に、「因音章」とあり、普燈錄卷五に「音釋曰、因戸臥切」とあり、道忠禪師は之に添へて「叢林相傳作唯字上聲呼」とある。

然るに寛文九年版の碧岩錄抄の著者は、特に「口ハ古ノ因ノ字、音章デソロ、シカルヲ郷(祖庭事々著者ノコト)ハ因ヲ音章ト訓ゼラレタハ未詳也」と云ふてゐる。尤もの説と云ふべきである。然し「力因希」は「力口希」の誤書であるとすれば、「因」を「イ」と訓することも肯定せられてくる。

虛堂錄梨耕第四に於て道忠禪師曰く

「忠曰、因ノ音訛章有ニ由來、雲門ノ語云、咄々々力口希、此口音章而謬寫作力因希、亦爲ニ音章、遂以ニ因字爲ニ音章也」

碧岩錄鈔、卷七、雜華院藏古寫本には

「因ハ集韻胡臥切、牽船聲也、郷云音章、此義奈何私云、雲門三字頌云、咄々々力口希禪子誦中眉垂、古抄云、因音章而於其中有ニ力字、力口二字ハ因字の分字也、希ハ助字、力口希ト云モ「エイ」ト云フ義也。只因字ノ心ニテ「エイ」ト云フ力ヲ出之義也、郷陸庵因ノ音章ト云モ、分ル時ノ義ヲ以テ口音ト一如ト云者歟」

道忠禪師は雲門錄の「力口希」の誤書なるを以て力因希と書かれてゐても「リキイキ」と訓めと云ふのに對し、岩鈔の著者は、雲門錄によると云ふ説を積極的に支持してゐない。然し「力口」は「因」の分字なるが故に「因ノ音章ト云フモ、分ル、時ノ義ヲ以テ口音ト一如ト云者歟」と別の角度より消極的に「因」も「イ」と訓むべきことを支持

してゐる。

(2) 因を「カ」と讀むべしとする説

因を「カ」と讀むべしと主張するの理由は、力因希を力口希の誤寫と見ざること、従つて因字を字そのものの音と、その意味（心華開發）とにより支持することに由來する。

虛堂錄犁耕第四に於て道忠禪師は

「字彙曰、因胡臥ノ切火去聲、進船聲」

「忠曰、廬山優曇寶鑑十丁七曰、嗟乎這一箇字、曠盡多少人、殊不知此字玉篇明載、戶臥反阿字去聲ニ呼也、此箇因字一切世人口中未嘗不說、噫如失物人、忽然尋覓不覺發此一聲、是因字也、宗門多言此字者蓋尋師訪道之人、參究三十年忽然心華發現、會得此事不覺因地一聲如失物得見、慶快平生是其字義也」

禪學辭典、神保如天、安藤文英共著

「因」船を牽く聲。力を出す時の掛聲。物を失ひて忽然尋ね得たる時發する一聲也。因地一聲、因地一下などあり。

音「クヰ」を正しとす。

和訓略解禪林句集、山本俊岳著

「咄々々力因希」解に曰く「馬鹿めが、眞に悟る者は希だぞ」

以上を綜合するに、因を「カ」又は「クヰ」と音訓することを主張する説は、皆因を字そのものの意味内容より「カ」を正しとしてゐる様である。然しこの説は一應妥當なるが如くであるが、一つの疑点を殘してゐるとも考へられる。

即ち因が、字それ自身に「思はず發する」力強い掛け聲（擬音）なのに、更に力字を添へて「力因」とすることは重復の憾みがありはしないか。古來の用法を見るも、因地一下、因地一聲と熟字するも、力因一聲、力因一下の用例を發見しないからである。

(3) 發聲上よりの見解

口、圍、草はいづれも同一の音であつて、一種の喉音「w」であり、日本的にはキ又はイと云へる。希、啼はいづ

れも同一種類の音であつて、現代支那音では「ㄨ」であるが、古くは「ㄨ」であつたと思はれ、日本的にはキである。力の現代支那音はで「ㄨ」であるが、古くは入聲が残つてゐたとすべきであるから「ㄨ」であつたらう。従つて日本的にはリキである。

以上を考ふる時「力ㄨ希」の三字の音は、古来より讀み來れる如く「リキイキ」とするが穩當の如くに考へられる。

音訓は一應以上の如きものとして、さて人天眼目應説に「力ㄨ註本録作ㄨ、希註舊解云助詞也」とあり、雜華院藏本の碧岩錄古抄に「力ㄨノ二字ハㄨノ分子也、希ハ助ケ字、力ㄨ希ト云フモ「エイ」ト云義也」とあるは、何を意味し何を示唆するか、即ち「希」を助詞也とする意味は何かの問題である。

發聲上より「希」を助詞とする意味は「ㄨ」の喉音を強く且つ稍長く發音する時、自からそこに主たる字の音を助ける音の生づる事は當然である。かゝる場合之を文字にて現はす時、強く發音されたる一字を二字にて書き表はされることがある。即ち希の助詞たる意味は「ㄨ」の發音を強め助ける意味に外ならない。換言すれば「ㄨ希」の二字は、發音として「ウエイ」と云ふ強く長い一音と見ることが出来る。

例へば支那に於てある地方の方言として「戰慄」を表現する場合「恐」の一字を「蛩拱」と二字の發音にて云ひ現されてゐることが「説文註」に記されてゐる如きが例證ではなからうか。

次に「ㄨ」の音は、前述の如く二つに發音せられてゐる。

1 祖庭事苑、卷二「ㄨ音章」

2 普燈錄卷二十、「音釋曰、ㄨ戸臥切」

祖庭事苑は今日吾が國に於て何人もその音訓に疑議を挟まず一樣にカと發音してゐる碧岩錄第六十六則「岩頭引頸云ㄨ」の音訓に對する註なる所に發聲上の問題を殘してゐる。(註。諸錄俗語解ニハ、ㄨ唐音「オウ」重キモノヲ引ク故思ヘズ聲「オウ」ガ出ルナリ、トアル。)

普燈錄は今日吾々の常識に添ふ音訓であつて「上堂、綠暗紅稀日、蜂忙蝶困時、本來真面目、一點不會移、ㄨ」と云ふ、漢州無爲隨庵守綠禪師の上堂法語に對する音釋である。

この二つの「ㄨ」字の用例は、その内面的意味には相違するところがあるも、その使用の場所としては發音に甲乙の生づる理由の認め難い處なるにも不拘、二人の宋代の禪僧が何故に「一は「音章」と云ひ、一は「戸臥切」即ち「火又ハ賀ノ去聲」と云ひ、兩者の間に音訓の相違を生じたであらうか。

之に對する答えは自然道忠禪師が虛堂錄叢耕第四に「雲門語曰咄々々力口希、此口音章、而謬寫作力凶希、亦爲音章、遂以凶字爲音章也」と示せる事に關聯を持つて來る。即ち「力口希」を何故に「力凶希」と謬寫するに至つたか、又何故に誤寫しても「イ」と音訓するかの問題に關聯をもつて來る。

思ふに「力口希」は元來語そのものに直接意味のある語に非ず、一種の擬音語に外ならない。若し然りとする時、力凶希が現實に發音せらるゝ時、力字の語尾音と凶字の語頭音とは混同消失し、力口希と殆んど音價を等しくする類似音となつて來るやうに思はれる。即ち口と凶との混用は、目より來る相似の誤寫もさる事乍ら、發音の相似より來る混淆と見らるる事も當然ではなからうか。

以上のことを勘考する時、よし約百年の時代的相違と、著者の住居する地理的相違ありたりとするも、同一宋代の兩禪僧が、祖庭事苑は「音章」と云ひ、普燈錄は「音戸臥切」と云ふ相違も、擬音語としては寧ろ強ちに問題とすべき相違に非ざる事が考くられ、同様の理由に於て「力口希」が「力凶希」となることも擬音語たる語本來の性格上自然の混淆であつたと考へられ、従つて力章希も力凶希も同様に、發音上より來る混用と考ふことは、一應當然とする結論が得られる如くに思はれる。

之を要するに、發音上より考へて、力口希、力章希、力凶希、力凶啼等が混用して用ひられてゐること自身、混用するも何等支障を來さざる程度に類似する擬音語なることの證左と云ひ得るのではなからうか。従つて力口希、力凶希等の語を、文字の意味即ち「凶ハ凶地一聲心華開發ノ意味スル」とか「口ハ圓ノ略字デ力ガ圍繞スル意味」等によつて理解せんとするは寧ろ誤りであると見るべきであらう。

要結。以上を勘考するに「力凶希」は古來よりの音訓の如く「リキイキ」とするを至當とすべきであらう。(假りに「力口」は「凶」とその意味内容を同一也とするも、凶を力口と二字に分字すれば、分字の上にて於て各字の音を發聲す

べきが妥當の如く考へられる。

四

「力口」は四の分字に過ぎず、故に分字

されあるも一字と同一意味なり、との説に就て。

雜華院古寫本碧岩錄抄に

「古抄ニ云、口音章而於其中有力字、力口ノ二字ハ四ノ字ノ分字也、希ハ助字、力口希ト云フモ「エイ」ト云義也」とあり

古抄とは此の場合何を指すか不明なるも、かゝる考へ方を無條件に否定することは出来ないであらう。況んや文字の國支那に於て、一種の文字上の戯れから「松ノ字ヲ公木」と書き「泉ノ字ヲ白水」と二分して書くことも、必ずしも絶無とは云はれないかも知れない。

然し、作偽の都合上文字數を調へるため四字を二分して力口とし、之に助詞希を加へて三字として用いたのであるが、三字となつてゐるも「エイ」と云ふ義也とする前記碧岩抄の解は、擬音語として背き得るところであるが、之を分字なるが故に分字されあるも四字の意味、即ち「四地一下の意味」に解すべしとする意見（今井福山、禪宗誌、第四六卷第九號 千宗守、利休居士の茶道）は、少くとも此の場合無條件に受け容れ難いと思ふ。

成程四字に就ては

1 澤庵禪師の「力口」と二字に分字した置き字に「箇秘密藏、八字打開、不踏橫路、直入得來」と讀語を書きし幅があり、心華發得の意が示され

2 禪關策進に「忽然四地一聲識得自己」とあり

3 廬山蓮宗寶鑑に優曇大師は「宗門多言此字者、蓋尋師訪道之人、參究三十年、忽然心華發現會得此事、不覺四地一聲如、失物得見、慶快平生是其字義也」と説き

4 白隱禪師は「遠羅天釜」に「命根斷截、因地一下の歡喜はゆめゆめこれあるべからず」と示す等禪に於ては「忽然心華開發時ノ喚叫」従つて「豁然大悟」時の表現として用ひられてゐることは事實である。

然し、禪に於て因字をかゝる意味内容の下に用ひたるは、寧ろ禪の衰へたる元代以後の事であつて、唐宋時代の禪語としては端的に「言亡慮絶」の活現乃至は機鋒を示す掛聲として感投詞的に用ひられしもの如くに考へられる。例へば、因字の禪録に現れし最も古いものと考へられる碧岩錄第六十六則を見るに

「岩頭（西八八七寂）問、僧什麼處來、僧云西京來、頭云黃巢過後還收得劍麼、僧云收得、岩頭引頸近前云因、僧云師頭落也、岩頭呵呵大笑」

とある如く「忽然心華開發」の意味ではなく、道忠禪師が虛堂錄聚耕に註せる如く「忠曰、因和語慧伊聲也、慧伊幾禮也の掛聲に外ならぬ。」

又、普燈錄卷二十、守緣禪師上堂の法語を見るに「上堂、綠暗紅稀日、蜂忙困時、本來真面目、一點不曾移、因。」であり、絶言絶慮底の一叫、に外ならず、優曇大師の説く如き「心華發得」の意味に用ひられてはゐない。

更に翻つて「力因希」三字句としての禪録中の用例も

1 雲門錄 咄々々、力因希、禪子誑、中眉垂

2 無明慧性語錄「篆不彫之心印、狀似鐵牛之機、阿呵々、力因希、再三撈攪始應知」

3 虛堂錄「卓拄杖、力因啼、咄々々」

（傍註云、若強解、是大活機用也トアリ）

4 貞和集「一對驗人双碧眼、眉間掛劍力韋希」

5 惠曉禪師上堂「聲前一句量外機、三八九力因希、寶鏡當臺不鑑、云々」

6 月航錄「咄々力因希、這箇是不涉耳目、語盡情忘底之一句頭也」

等の如く、いづれも連宗實鑑に見る優曇大師の説の如き「忽然心華開發」なる心理的經驗を表現すると見るよりは、「悟の當體」即ち「篆不彫之心印そのもの」を直接具體に活現する活句的表現と見るべきか至當の様である。

要結。以上によつて明かなる如く「力口」がよし「力口」がよし「力口」の分字なりとする、四字そのものが己に（イ）擬音語としての四、及び（ロ）擬音の發現的由來より生ずる一語義「心華開發の經驗」としての四、なる二様の用途あり、従つて「力口希」の場合は（イ）の用途と考へられ、その用例の示す如く（ロ）の場合とは考へられない。（分字に非ずとする場合は一層（ロ）の意味は含むで來ない。）

五

「力口」は果して四の分字なるか。

碧岩錄古抄に「力口ノ二字ハ四ノ字ノ分字也、希ハ助字、力口希ト云フモ「エイ」ト云フ義也」とあり、擬音字「四」が、力口となり、更に發音助詞「希」が添えられ力口希となつたものであり、力口希とあるも實は「四」一字と見るべきものとする考へも、感投詞の擬音字とし、用例に徴して肯くべき説の様に思はれる。

又、文字上戯れとして試みらるゝ「松字ヲ公木」「泉字ヲ白水」と分字する如く（千宗守著利休居士の茶道、一〇七頁）四を何等かの必要により力口と分字せるものであり、従つて力口は四と同一也とする説も、一應肯き得る説の如く考へられる。

然し、力口希が力四希と音の類似によつて混用されてゐるのを考へる時。碧岩錄抄の意見が信用ある典據を明示せず、俗説に非ざるかを疑ふ餘地あるを考へる時。考證至らざるなき學匠道忠禪師も力口が四の分字なる点に何等言及せざるを考ふる時。この分字説は妥當なりや否や早急に決定致し難い様にも思はれる。

六

力口希、力四希、力四啼、力四規、
等の字義を各別なりとする説。

今井福山師は、禪宗誌第四六卷第九號「利休翁の遺偈」なる文中に於て

1 力圍希は、蜀の方言で「リイク」と讀み身力の稀少なる義、即ち血氣の欠亡せる事。

2 力囚希は、茶事三昧中、囚地一聲大悟する茶道人が稀なる義で、力圍希と力囚希とは全然その旨を異にせり。

3 力圍規は、蜀の方言、圍は圍繞の義、規は分廻して圓滿の義、故に禪語では道力が心中に充滿してゐること。

4 力韋希は、宋代洪洲の方言、韋は偉の義、殊勝な偉力のあること。

5 力囚啼は、洛陽語の閉口（方言音）を蜀で「リカク」と云ひ「咄哉口で説くところはない、本來面目露堂々」の意。

等と説かれてゐるが、これら數種の類似語は道忠禪師の考證の如く、雲門錄によつて「力囚希」の一種と考へらるゝ時、發音によらず、文字の相異よりする義解には背き難いものがある。然も今井師の説は、自己の獨斷を弄し過ぎ科學的究明に乏しき憾みあり、直ちに首肯致し難く、猶専門家の檢討を俟つべきものと思ふ。

要結。さて「力囚希」一聯の相似語は、寧ろ感投詞的發聲音の語として、使用の場合により多少その表現せんとする内容を異にするも、略相似のものとするべきであり、月航錄に云へる如く「這箇是不涉耳目、語盡情忘底之一句頭也」と見るを最も妥當とすべき様に考へられる。従つてこれらの語は、發聲音その儘を受け取るべき性質のもの（勿論その表現内容は時と場合により異なるも）であり、概念的に別個の語義を直接もつものではない様に思はれる。

註、和訓略解禪林句集の著者山本師が、力囚希と云ふ古來の音訓を「力囚希」と故意に改め、囚地一聲の意に解せられし事は、今井師の説に従ふものであつて、寧ろ誤であると思ふ。

七

以上全篇の總結

△「力囚希」は古來數種の類似する語形を見るのであるが、雲門錄を據りどころとし「力囚希」を原形とするものと考へられる。（囚は圍の古字として「力圍希」の語形も肯ける譯である。）

△「力因希」の音訓は、古來の讀み傳への如く「リキイキ」と讀むことが妥當の様考へられる。

△「力因希」が「力因希」と書かれてゐる事は、文字の相似にもよるが、擬音文字として發音の相似より來る混用の如くにも考へられる。

△「力因希」は、發聲音をその儘受け取り、そこに「言亡慮絶の人格の活現」を見るべきが禪的であつて、語義を解釋すべきものではない。

△力因は因の分字であり、希は助字であり、「力因希」とあるも「因」と同一也とし、感投詞的無義音語とする意見は、前項の意味に於て肯き得るも、「因地一聲、心華開發」の義とする意見は、「力因希」の場合まづ無理の如く考へられる。

八

附言

以上によつて大體利休居士遺偈中の「力因希」に就ての検討は、私として一應の結論を得た様に考へる。

従つて次に遺偈全句の解釋に移るべき順序であるが、中心となる語句の検討を終つた以上、已に定められた頁數を超過してゐるので、それは別の機會に譲ることとする。然し次の數行を附言して置き度い。

近年發表せられし數多き利休居士遺偈の註解のうち、最も代表的なるものが四篇ある

1 茶道、せうらぎ誌、第三卷第四號所載。

2 禪宗誌、第四六卷第九號所載、今井福山師。

3 茶道百話及武者の小路所載、近重眞澄氏。

4 利休居士の茶道、辭世の章、千宗守氏。

以上の四篇を見るに、それぞれ多少の出入ありとするも大体大同小異であつて、ありふれた文字上の義解に過ぎず、遺憾ながら豊かな禪的含みの無いものでると私は考へてゐる。